

〈研究ノート〉

大学留学生にとっての小学校との交流活動の意義

星 圭子*

Assessment of the Interactive Program of Foreign College Students
with Elementary School Children

Keiko Hoshi

要 旨 本学留学生と小平第十小学校第4学年との交流活動が2007年7月より5回にわたって行われ、留学生はこれに日本語教育の授業の一環として参加した。本稿では交流後の留学生によるレポート、アンケートから、留学生たちにとってこの活動はどのように評価されるものであったか探った。その結果、留学生が交流活動で得たものとして最も評価が高かったのは「コミュニケーションスキルの向上」であり、また「地域小学生との心の交流」であった。留学生の満足度を左右した要因は双方向コミュニケーションの成功であり、相手の発話に自分が、自分の発話に相手がどのようにレスポンスするかということが、活動の成功不成功の判断基準として感じられていた。これからの交流においても双方向のやり取りが成立するような活動ができるかどうかが重要であろう。

1 はじめに

1996年中教審答申以降、国際交流活動が小中学校の総合的学習の一環として活発に取り上げられるようになっており、大学や日本語学校等の留学生と近隣の学校との交流が活発化している。大学は、その研究成果を通じて地域への貢献を実現する使命があると同時に、学びを地域に還元する実践活動を通じて大学生自身の学びをいっそう深めうる。このような認識のもと、本学小平キャンパスにおいても、平成17年度からの文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム「子どもから高齢者までのウェルビーイングライフスタイルコミュニケーターを育成し地元住民を元気にする取り組み」や児童英語教員養成課程学生による小平第十小学校での英語教室「英語で遊ぼう」をはじめ、地域との教育コラボレーションの実績を積んできている。

本稿は小平キャンパス留学生の日本語教育の一環として行った小学校交流の実践報告である。

2 留学生の日本語教育としての小学校交流の意義

日本語教育の現場で、小学生との交流活動が大学留学生の日本語教育の一環として行われたと

* 本学准教授 日本語教育学

いう報告はこれまでも多くある。

菅野・西村（2007）の試みでは、2003年からの大学周辺地域の小学校との交流活動を、「基礎日本語Ⅱ」という授業の中の、留学生の口頭発表能力向上のためのプロジェクトワークとして位置づけている。口頭発表の対象が小学生であることにより、大人のように「わかってあげよう」という配慮をしない聞き手にも十分理解できる発音を目指させるための動機付けとなるとする。

上田（2003）では中部大学における1993年から続く小学校訪問の状況を紹介している。訪問はプロジェクトワークとして日本研修プログラム生の作文の授業に組み込まれ、作文能力、発案能力、資料収集能力、発表能力などの向上、多様な日本人と対峙できる社会言語能力の向上、そして、明確な聞き手を置くことによる作文、発表の動機付けの強化を目標としており、それについて一定の成果をあげているとしている。

以上の研究では大学留学生と小学生との交流活動に一定の意味を見出している。そのほかの要素も考えつつ、両者の交流から想定できる留学生にとってのメリットを挙げてみたい。

①日本語会話力の向上

コミュニケーション・アプローチの立場からは、会話力養成のためには現実的コミュニケーション実践の場が必要とされる。一般的に会話指導の場面において、表現対象がクラスメート同士に限られる場合、表現活動そのものが模擬的になり真のコミュニケーションでなくなるため、表現を行う動機が乏しくなりがちである。非学習者との交流は、伝わるかどうかという切迫感のある発表機会であるため、現実のコミュニケーション場面で自らの口頭表現能力を試すことになる。そのため、より効果的な話し方を自ら模索するようになり、発話能力向上の動機付けになることが期待される。また、日本語の表現技術として大人とは違う子どもに対する話し方、文体を学ぶことも同時に期待される。

②日本文化の学び、異文化意識の向上

会話能力向上のほかにも、日本理解の上で現実の日本の生活の多様な場を体験・見学すること、また、多様な日本人に触れ日本人イメージを深めることは日本理解の面から望ましい。今回、大学の外に出て小学校という教育場面を観察できることはそのひとつと言える。また、自国の代表として日本人の子どもに自国を紹介することによって、自文化についての新たな気づきを得、さらに、日本の子どもの異文化理解の現場で役割を果たし、異文化交流活動に貢献したという実感を得ることも異文化意識を高める点から意義深い。

教員側からは①、②のような意図を持った活動を、留学生自身はどのように評価しているだろうか。本稿ではそれを検証していく。

3 実践報告

3-1 交流までの経過

2007年7月より08年1月まで、小平第十小学校第4学年と本学現代文化学部国際文化学科の留学生との間での交流授業が行われた。下記のような小学校側の目的や条件と、大学の留学生の会

話授業の目的や条件とをすり合わせつつ、毎回の活動が考案された。

小平第十小学校第4学年においては国際交流教育が総合的学習のテーマとして取り上げられた。単元目標は「文化女子大学の留学生との交流を通して、自分なりの課題（相手の方の国や日本の文化など）をもって進んで調べたり、調べたことをもとにして外国の方とかかわったりすることができる。・外国の人と一緒に活動する中で、相手の良さや自分の良さを互いに気付くことができる。・自分なりにかかわり方を工夫して、相手の方とともに楽しい時間を過ごし人とかかわる心地よさを感じることができる。」（倉岡2007）であった。そのため、今回の活動では小学生が異文化交流を人との「心地よいかかわり」の一環と捉え、それに向けて自発的に行動しつつ友達と一緒に考えることができるような活動内容が求められていた。

3-2 授業の目的と交流主体

小学生との交流は、本学現代文化学部国際文化学科1年生対象「日本語会話」の授業の一環として行った。この授業そのものの目的は日本語口頭表現能力の強化であり、テキストは『日本語上級話者への道』¹⁾を使用している。交流主体はこの授業の受講者6名であり、交流準備と交流活動、反省活動を行った。その他に、上級生数名が交流活動のみに何回か参加した。

学生の発話レベルは4月のOPIテスト²⁾では中級の下～超級までの差があったが、分布としては中級の学生のほうが多かったため、目標は低めに設定し、①発話で文を中心とした発話から文を組み合わせることで段落レベルの発話を形成できること、②日常レベルの発話のみならず、公の場での発表能力をつけることを目標とした。

小学生は第4学年の3クラス、全81名であった。

3-3 交流の流れと授業との関連

今回の交流は2007年7月から2008年1月まで全5回行われた。内容、場所、参加留学生数、活動時間など、活動の詳細については以下の表にまとめた通りである。

第1回目の授業の前には日本の小学校生活の紹介VTR視聴や資料読解を行い、また、自国の小学校生活を振り返ることなどで、小学校訪問についての意識づけを行った。「日本語会話」の授業との関連づけについては、大学側から考案する活動は可能な限り『日本語上級話者への道』の課のテーマを生かして小学生向けの内容にアレンジするようにし³⁾、テキストで求められる発表活動を教室外の相手に対して実践する場として交流活動を位置づけ、シラバスとの関連を持たせた。そして、各交流前の授業でその発表内容を検討、準備し、必要ならパワーポイントなど視覚資料も作成した。交流後は、発表活動や小学生との交流活動の反省や感想を話し合うなど、反省活動の時間をとった。

各交流会の流れ

回	内容	場所／参加者数	活動時間
第1回 2007年 7月15日(木) 3限	留学生一人につき小学生9人前後で1グループを形成。小学生が事前に考えた留学生の母国についての質問に、留学生が回答。また、留学生から小学生の生活について質問。	文化女子大学／ 留学生9名、小学生81名、日本人学生4名	全1時間。30分たったら他の国の留学生に交代する
第2回 2007年 10月18日(木) 3限	各クラスの子どもたちが考えた活動を小グループになって行う。その他、小学生からの各国についての質問に留学生が回答。 前半(2組)：小学生による日本の食、遊び、交通、スポーツ、行事などについて調べたことの発表やクイズ、質問や実演。 後半(1,3組)：小学生による料理、折り紙、工作、ゲーム、手遊び歌などのやり方の説明。留学生はそれと一緒にやってみる	小平第十小学校／ 留学生7名、小学生81名	全1時間。30分ごとに全留學生が別のクラスの活動へ移動
第3回 2007年 11月1日(火) 13時50分～ 15時20分	クラス単位での活動 ①留学生がパワーポイントで母国を紹介 ②留学生が母国の子ども遊びの紹介(韓国) ③留学生による母国の子ども遊びの紹介(台湾)	小平第十小学校／ 留学生7名、小学生81名	全1時間半。①～③それぞれの活動を留学生数名ずつが担当、30分ごとにクラスを入れ替える
第4回 2007年 12月13日(木) 3限	クラス単位での活動 ①留学生が母国の昔話をパワーポイントで発表 ②小学生が留学生に生活の写真を説明(クラス全体での活動) ③小学生と留学生のまじった小グループになり小学生の考えた活動を行う(遊び、スポーツなど)	文化女子大学／ 留学生10名、小学生81名	全1時間。①～③それぞれの活動を留学生数名ずつが担当、20分ごとにクラスを入れ替える
第5回 2008年 1月17日(木) 3限	クラス単位での活動 小学生が考えた活動を小グループに分かれて行う。(料理、工作、トランプ、昔遊び、室内ゲーム、手作りおもちゃ作成、スポーツ、日本の歌の紹介、折り紙、伝統遊びなど)	小平第十小学校／ 留学生5名、小学生81名	全1時間。20分ごとに全留學生が別のクラスの活動へ移動

3-4 今回の活動の特色と方法

①複数回交流であること

前述のような小学校側の学習目標から、この交流は初めから複数回の活動として企画された。他の論文で発表された交流活動を見ると、多くはイベント的な1回の交流である。今回のような同じ相手との5回にわたる流れを持った交流は珍しい。

②活動時間

イベントでない双方の授業の一環として行うこと、かつ小学4年生の集中力の持続時間、留学生の人数の少なさと活動方式(後述)の兼ね合い等の制約から移動と交流含め90分以内、各交流活動30分以内という短時間の交流の積み重ねとなった。

③活動方式

小学4年生対象ということから、以下の内容が活動スタイルとして事前に申し合わされた。

- 小グループでの活動(留学生一人に小学生5～6人くらい)が望ましい
- 講義のような言語中心活動より、そばで触れ合うような体験型の活動が望ましい
- 口頭での説明より、視覚的に示せるような提示の仕方が望ましい

④双方向からの活動提案

大学留学生側の活動目的と小学校側の活動目的をともに満たすため、各回の活動は回ごとに小学生側の提案した活動中心となったり、大学側の提案した活動中心となったりした。前者は、小学生自身が前回の交流の活動をもとに発案をすることで決められた。後者では、担当教員が授業の使用テキストの内容を生かし小学生にも興味を持たれ、かつ留学生が十分話せるようなテーマを考案した。1回の活動が双方の2部構成になることもあった。

活動内容は担当教員同士の連絡により事前に小学生と留学生に伝えられ、それに基づいて必要な場合準備活動を行った。

⑤相互訪問

小学校では3回、大学では2回の交流を行い、相互に互いの校舎を訪問しあうことが予定された。互いにそれぞれの学習環境を見ることで、日本の小学校や大学についてのイメージ作りができることが期待された。

4 交流活動の評価

4-1 分析手法と問題提起

「日本語会話」受講生6名には、各交流直後の授業時間に感想を話し合った上でそれぞれの回についてレポートを課した。また第4回の終了後、活動全体をまとめる最終レポートを提出させた。活動終了前に最終レポートを課したのは、第5回の活動が茶話会的なものになる予定であったため、また、1月の定期試験前に留学生に過重な負担がかかることを避けるためである。全5回の交流の終了後にはアンケートを行った。

これらのアンケートとレポートの回答等をもとに、以下の項目について分析を進める。

①本学の留学生に小学生との交流は日本語口頭表現能力の向上に役立つと評価されるか

小学生の話し方や、発表・理解できる内容は、大学レベルの留学生に普段要求され指導される文章語や、専門的内容とはかけ離れているため、大学留学生の日本語教育として本当に意味ある活動になるのかという懸念もまったくないわけではない。

一方で、先に述べたように、社会言語能力が獲得できるのではないかという言及や（上田2003）、外国人的発音をわかろうとしない聞き手にもわかってもらえる発音習得への動機付けになるという見方もある（菅野・西村2007）。今回の活動を、留学生は大学の授業の一環として自らの日本語口頭表現能力の向上にとって役立つと評価するのか。

②本学の留学生に小学生との交流は相互文化理解に役立つと評価されるか

花見・橋本（2001）では、小学校教育はどの留学生にとっても自国のシステムや自身の経験に照らして容易に比較可能な対象であり、交流はそうした制度や環境の違いを観察する機会だ（pp. 37-8）と述べるが、確かに小学校訪問そのものが日本社会の一部である小学校の観察機会となるだろう。

国際交流活動そのものについてはどうか。互いに異文化の相手に自国について紹介することは、留学生・小学生双方に文化の相互理解活動として認知されるだろう。ただ、小学4年生は日本文

化についてまだ無自覚であり言語的に表現することがやや難しい。情報の受容についていえば、聞き手側の留学生がそれを日本文化理解活動として意義あるものと判断するだろうか。

以上を踏まえ、小学校との交流は大学留学生にとってどのような意味があり、留学生が満足する交流を行うにはどのような形が望ましいのかを考えたい。

4-2 留学生のアンケート・レポートより

4-2-1 各授業後報告と、レポートの記述

①第1回後の感想・報告

この回は大学で行われ、10人以上が1グループとなり、グループを単位とした口頭活動のみが行われ、おおむね小学生から留学生に対して、各国についての質疑応答が30分ずつ2セット行われた。

1) 小学生の印象形成と自らの発話への評価

初顔合わせであること、留学生一人につき小学生9名であったこと、各国についての口頭のみでの質疑応答に終始したことから、留学生によって活動の感触がかなり異なっていた。

口頭表現能力や対人接触能力に優れた学生はこの機会を楽しみ、「元気で活発でかわいい」「かわいくて素直で礼儀正しい」「小学生で自分の意見をこんなに素直に言えるのはすばらしい」など、小学生との楽しい会話を成立させていたようだったが、日本語口頭表現能力に優れていない学生、子供との交流に慣れていない学生、また、性格的に緊張しやすい学生などは、「いい交流だと思う」と認めつつも、自らの質問や回答に自信が持てず、「小学生は話すのが速かった」「子どもの興味を引く質問ができなかった」「今ひとつ小学生にとって面白くなかったのでは」など小学生の反応が気になったようであった。

2) 小学生の持つ異文化意識への気づき

小学生の発話に関しては「小学生らしい純粋な質問だ」としつつも、「まだ子どもなので外国のことをよく知らないのだろう」と自国についての知識や関心の低さを指摘したり、「お互いの好きなものを並べて共感しあおうとしていた」ことを大いに評価しつつも「異文化意識が低い」と考える学生が多かった。小学生は外国人との交流機会がない人が多く⁴⁾、「台湾に本屋があるか」という質問などは自らの日常と留学生のそれを重ね合わせて具体的に想像していこうとしたための質問であろうが、すでに異文化の中で生活する留学生はこの質問に驚きを感じていた。

質疑応答の中で留学生のほうから日本の小学校のようすや小学生の生活について聞き、「日本では男の色、女の色がはっきり決まっていない」「子どもの遊びは自国と似ているものが多い」「朝ごはんは普通うちで食べることが多いそうだ」など、自国との習慣の異同に気づくこともあったようだが、文化理解に関しては「小学生が何を聞きたいのかわからなかった」など、質疑が深まらず断片的に終わったという印象があったようだ。

3) 自文化説明の難しさの発見

小学生の自国文化についての質問にその場で答えることの難しさをほぼ全員があげ、「準備が十分必要だ」と記述していた。

②第2回後の感想・報告

1) 小学校訪問、体験型交流に対する評価

この回は小学校に行つての交流会で、「小学校に行ったことがよかった」とそのことにまず満足を感じた学生がいる。また、今回の交流は口頭のみ質疑応答ではなく、小学生が視覚資料や実物やクイズなどを準備して日本文化を説明する形であったり、日本の遊びを実際にやる体験型活動であったため、日本語力の低い学生でも「言葉がわからなくて前半緊張したが、後半は遊びで楽しめた」など、評価が高かった。

2) 発表準備の大切さと効果の実感

準備については前回問題となったが、今回は小学生からあらかじめ質問を受け取って回答を準備でき、小学生自身が発表や実演などを行ってくれたことで、「たくさんの資料を準備してくれて感動したし、わかりやすかった」「互いに準備ができてから話したのでわかりやすかった」と複数の学生が肯定的評価をしていた。

3) 小学生の成長の気づき

小学生からの質問に関して「前回よりどんどん質問してくるので時間が足りなかった」とその発展を認める記述があったが、事後の授業での報告では、「前回より小学生の質問が高度になった」という発言と「まだ～はありますかと聞かれた」という発言が交錯した。

③第3回後の感想・報告

1) 自らの発話を通じた実感と満足

小学校での活動で、大学の授業のない日に行われたため普段より長く時間が取れ、30分ずつ3クラスに分けて活動を行うことができた。活動の一つは「留学生の国の紹介スライドと発表」、他は国別の「留学生からの国の遊びの紹介」であった。この回は前回とは逆に、留学生から小学生へ発表を行うものであった。

その出来ばえについては、「留学生の国の紹介スライドと発表」の方はまあまあと評価するものが多く、「緊張した」「アクセントを意識しすぎて間違った」「準備したものを提示し忘れた」など発表自体には満足していない記述が多いが、小学生からの質問が来ることで「わからないことは質問してくれたので真剣に聞いてくれたことがわかった」と発表の際のやりとりは評価している。「遊びの紹介」の方はほぼ全員が「小学生に伝わった」「喜んでもらえた」など、じかに聞き手の反応が伝わった喜びに関する記述が多かった。

第3回についての評価はこの交流活動全体で最も高かった。その原因は「国の説明」「遊びの説明」ともに留学生の「発表」活動であったことで達成感が味わえたこと、自らの「発表」に対する反応を、質問を受けることや小学生が体を動かすことで、直接的かつ明確に確認できたことにあると考えられる。

2) 親近感の醸成

また、この回の感想の特徴は、小学生の「親近感」についての指摘が増えたことである。「子供たちとの距離がどんどん近づいた」「前回あまり話しかけてこなかった子が話すようになった」「名前を覚えてもらった」「子供たちからボディタッチをされた」「久しぶり、と挨拶してもらっ

た」など、ほとんどの学生から指摘があった。その原因を活動内容に求め、「遊びのおかげで互いの親しみが非常に増した」「遊びがすごく盛り上がった」等と指摘している。

3) 小学生の変化や成長の実感

それと平行して、子供たちの学びの態度の向上や、学びの成果を指摘し、真剣な態度に喜びを感じる記述も増えた。「小学生たちは全体的に積極的になった」「集中して聞いてくれる子が増えた」「前回自分が説明したことを覚えていてくれた」「質問のレベルが上がった」「前の2回より国のことをわかってくれた」「他国に興味を持って活動に臨んでいるように感じ、ありがたかった」等と記述している。

④第4回後の感想・報告

大学に小学生を招いての活動で、正味1時間の間に3種類の活動をクラス単位に行った。一つは小学生の発案した遊び、一つは留学生から小学生に要望した「小学校生活の写真を見せて説明」、一つは留学生による「国の昔話」のスライドである。

1) 発表への真剣な取り組みと聞き手の反応への意識

「国の昔話」スライドの説明に向けて留学生はこれまで以上に発音や昔話らしく聞こえる話し方などの練習を行った。そのため、緊張感も期待感もひとしおであった。しかし、教員の教室選択ミスで、小学生が留学生に背を向けて教室後部のスライドを見るようになってしまい、留学生のこの活動の感想として「子供たちの反応がわからなくて、話を聴いてくれたかどうかわからない」、そのため「練習したのにその成果が発揮できなかった」「上手に出来なかったのではないか」「小学生はつまらなかったのではないか」という事態を招くことになった。ただ、練習そのものには「昔話の効果的な読み方、アクセントが学べた」「準備の大切さを学んだ」等の肯定的反応を示した。

2) 双方向会話への期待

「小学生の写真説明」については、終了後に授業で感想を聞いてみたところ、子どもたちが手を挙げて活発に説明してくれ、留学生からも質問できたという学生もいたが、その一方で「その場で写真を見るだけでは、今一つ質問が出せない」「前もって質問を準備しておきたかった」という感想や、「説明の内容が『いつ、どこで、誰が撮ってくれた写真』だけで、こちらのほしい情報がない」「行事の詳しい説明、たとえば何のために、何をやる行事であるか（七五三の目的は何で、千歳飴はなぜ食べるのかなど）がなかった」という感想も出た。

この活動を留学生たちが発案した動機は、本に書いてあるようなことではない「小学生が実際に体験した日本の行事」や「実際の日本の小学生の生活」を知りたいという理由からであった。小学生の撮った写真を見ることで、行事の現実を実感的に理解できると考えたのである。

だが、実際の場面ではやはりその場で写真を見るだけでは情報量が不足であった。また、これはどんな行事で小学生自身がどう行事を体験したかなどについては、日本人の立場からは常識として意識に上らない内容であり、相手が何を知りたいかわかりづらい。やはり留学生の方から積極的に質問をすべき事柄であった。「質問が出せない」と言ったのは比較的発話力の低い学生であり、写真、それも異文化のものを見て、その場で興味深いポイントを捉えて質問を発するのは

高度な技術であることから、そのような場面で質問を考える練習や、あらかじめ行事について調べておくなどの準備活動が必要であったと思われる。

テキストで学んだ日本文化の知識を、さまざまな生活者の発言から確かめていくような活動は、留学生にとって有意義で、それができるのは貴重な機会である。今後このような活動をいかに行っていくか、方法を考えていきたい。

前述の「国の昔話発表」も、この「小学生の写真説明」とも、説明・発表とそれについての質問などが組み合わされた活動であるが、自分自身や小学生の反応があまり活発でなかったところに不満足があると読み取れる。

3) 時間不足・接触不足について

今回は前回に比べ「小学生と十分接触できなかった」「今回は時間がなかったので楽しくなかった」と否定的に評価した記述が見られた。前回と同じように盛りだくさんの内容でありながら時間が十分とれず、活動そのものが消化不良になってしまったきらいがあったためであろう。

4) 小学生の成長と互いの親近感の高まりの実感

しかし、小学生の成長ぶりを強く実感した回でもあったようだ。「最初があっけにとられる質問をしてきたが、今は質問内容が具体的になった。日本も外国も変わらないと気づいてもらったのではないか」「最初はなかなかこちらの質問に答えてもらえなかったが、今は積極的になっていたので驚いた」「最初は外国人だという好奇の眼で見ていたが、2、3回目からは外国人だけ普通の日本人と同じに話せる、遊べるというかかわり方ができた」「国の紹介の後自分から台湾に興味のある子が声をかけてきてくれた」など、異文化意識の高まりを感じたり、「4回の活動で皆と親しくなれた」「最初は小学生も緊張からか、日本語が心配だったのかあまり話が進まなかったが、2回目以降どんどん話が進むようになった」「名前を覚えてくれた」「手をつないできた子がいてうれしかった」など、親密さの強まりを実感したという記述が多かった。

⑤まとめ

以上、各回の活動後レポートからは、最初は小学生達との初めてののかかわりに戸惑っている状態から、交流を繰り返すことによって表れた小学生の親近感や異文化理解度の向上に驚きつつ、喜びを持ってそれを捉えていくという変化が読み取れる。また、留学生が自らの発表を、常に小学生の反応から細かく評価し、そのことが発表の動機付けとして働いているようすがわかる。さらに、彼らは自らの発表であっても小学生の発表であっても、それを基にした自発的な活発なやり取りがどれだけなされたか、ということをも成功判断の目安にしているということが読み取れる。

4-2-2 第4回後の最終レポートの記述

最終レポートでは以下の見出しにあげた①～④の項目について順不同に自由に記述させた。各項目ごとにそれについての記述と思われる部分を最終レポートから抜き出し、まとめてみる。

①交流活動を通しての学び

この項目では言語的、文化的等のジャンルを指定せず記述させた。

その結果、言語的学びに関しては、「今まで使ったことのない表現を学べた」という記述があっ

ただけであったが、最も記載の多かったのは、コミュニケーションスキルに関する学びについてである。「話の構成、説明の仕方、面白さの伝え方を学んだ」「コミュニケーションスキルを学んだ」「相手の共感を得るため、自分の意見をスムーズに伝えるために工夫をするということを学んだ」「情報を共有しない相手には相手がどこまで知っているか意識することを学んだ」「視覚資料と事前調査の必要性と効果を学んだ」「ジェスチャーや写真などの表現手段を活用すべき（2名）」「相手によって言葉と話し方を変えるべき」「大勢を前にした話し方を学んだ（2名）」等、パブリックな場で相手に伝えるためにはどうしたらよいかという問題意識を持ち、その方法を工夫したことが伺える。これは、授業内で模擬的に発表を行うだけの授業ではこれほどまでに強くは意識されない項目であろう。

また、社会言語能力に関するスキルについての記述も見られた。「子どもとどうやって話せばよいかわかった」「（先生が）子どもに『です』『ます』で話すのはなぜか？これからの課題」など、経験を通して話し方の違いに気づき、自ら工夫していった様子が伺える。

その他、精神的な成長として、「大人数の前で少し勇気を出して話せるようになった」「緊張せずに小学生と話せるようになった」「苦手な説明も回を重ねるごとに怖くなくなってきた」という記述もあった。

②自らの会話力の上達

「少し上達した（2名）」「この授業で上達したかどうかはわからない（2名）」というように、自らの会話力の上達に関しては控えめな評価が多い。それは、この発表が「上手にできたと思ったら次の時間に叩きのめされた」というような経験の繰り返しだったからかもしれない。だが、「発音の練習をしたのでそれがわかるようになった（2名）」「聴く力が伸びた」と、会話に関連する個別技能に関しての上達を指摘する記述はあった。

③小学生とのかかわり、小学生についての理解

まず、小学生についての自らの気持ちの変化を述べる感想があった。「子どもは嫌いだと思っていたが、自分の兄弟や、自分の子ども時代のことを思い出すと嫌いではなくなった」「子どもたちとの付き合い方を学んだ：身の回りのこと、体を使った活動が好きで、（他人にすぐ）なじめる子もなじみにくい子もいる」「自分の小学生時代を振り返ってみることができた（2名）」など、交流を通じて、小学生というものについての理解を深めたり、記憶や感覚を取り戻したりしているようすがわかる。

また、この交流での子供たちの成長を実感する記述が目立った。「小学生は遊び（という共通の興味を）通してこちらと共感しようとした」「小学生は会うたびに質問の内容や参加態度が良くなったので、彼らとの交流に不満はない」「子どもたちの成長を実感した」

その他、日本の小学生そのものについての理解に関する記述もいくつか見られた。「日本の小学生は礼儀正しいという印象が強まった：文化が根底から違うのだろう」「ゆとり教育のせいか、日本の子どもは韓国／台湾の子どもより純粋（2名）」など、小学生そのもののイメージの深まりを感じさせる記述もあった。ただ、それは期待したほど多くなく、その一方で「水泳などスポーツの分野での違いを学んだ」「小学生の生活や遊びなどが国と似ているのでビックリした」など

まだまだ断片的な印象や知識にとどまっている記述も混在していた。それは活動時間の短さや活動内容等によるものであろう。

④交流活動全体としての感想

活動そのものについての感想として、「遊びや絵を描くことが本当に会話力上達につながるのかと最初は思っていた」「1回目はコミュニケーションがうまく行かなかった気がした」「第1回目は非常に緊張した(2名)」とあるが、その後は「楽しかった」「3回目は一番楽しかった」など、肯定的な評価に変わる。

最も多かったのが、小学生との心の交流の成立を評価する声である。「小学生と親しくなれて楽しかった、うれしかった(3名)」「小学生と遊んだり話したりするのが楽しかった」「子どもと手をつないだり普通の会話ができるようになって失敗が慰められた」などである。

また、自らの言語活動の達成に対する喜びがある。「子どもたちが紹介した遊びを覚えてくれてうれしかった」「みなが自分の国の説明をわかってくれたのがうれしかった(3名)」また、失敗の経験から、「練習が足りなかった(2名)」「きちんと準備しなければちゃんとした成果が収められない」と反省する声もある。

さらに、交流の意義として「自分の国のことを日本の小学生に知らせることができた」と述べたり、「プレゼンで失敗ばかりだったがとてもよい経験をしたと胸張っていえる」と総括する学生もあった。

4-2-3 留学生アンケートの結果

最後のアンケートは自由記述でなく、受講生6名に交流活動のやり方や成果について以下の項目を先に提示し、はい/いいえなどの選択肢を選ばせる形で回答を得た。結果は次の表の通りであった。ここからは、回数は適切だったと考え、小学生との交流が会話練習として意味があったと評価していること、問題点は十分な時間をとって交流ができなかったこと、交流の内容にやや問題があったことだと考えていることがわかる。

1 全5回の交流は

多すぎる	1名
適切な回数	5名
少なすぎる	0名

その理由は(自由記述)

月に1回ぐらいでよい(1名)

準備の時間が必要、準備の内容を忘れないうちに発表できる(2名)

この位の間隔だと小学生の前で話す感覚を忘れずに最後まで参加できる(1名)

(これより)少ないとなかなか交流できない(1名)

2 実質活動時間1時間について

長い	0名
適切	1名
短い	5名

その理由は(自由記述)

時間が足りないと常に感じていた(1名)

2時間ぐらいが適切だ(1名)

2時間ぐらいで、子どもたちと食事をしたりしてもいい(1名)

1時間でも活動は2つぐらいにして1つの活動に集中したい(1名)

3 成果は

あった

なかった

日本の小学生の現状を知り、日本事情を理解できる	5名	1名
発表の場を持つことで、より真剣に発表に取り組める	5名	1名
聞き手により効果的に伝わる話し方をしようと考えられるようになる	6名	
大人とは違う、子どもに対する話しかた、文体を学べる	6名	
日本の子どもの異文化交流に貢献できたと実感する	6名	

その他の成果は（自由記述）

小学生と仲良くなれた

4 交流の問題点と思うこと

小学生と十分話すことができない	2名
小学生の大学生への対応に不満	0名
小学生は子ども過ぎて会話の練習になりにくい	0名
小学生にした発表内容では自分の会話力を伸ばすことができない	0名
大人数に対して話すのが苦痛だった	0名
話より遊びのほうが中心だった	1名

その他（自由記述）

日本の伝統遊びが（自分も）したかった（1名）

4-3 考察

上記レポート・アンケートから読み取れる留学生のこの活動に対する評価をまとめてみる。

①本学の留学生に小学生との交流は日本語口頭表現能力の向上に役立つと評価されるか

教員の予想を超えて、留学生の「コミュニケーション」に関する学びが深かった。日本語口頭表現技術としては、コミュニケーション全体にわたる複合的な能力を学んだという評価が多い。

構成のしかた、説明の流れに対する意識など、段落を単位とした話し方への意識も高まったが、それよりも強く感じられているのは「聞き手にアピールするための話し方」である。聞き手としての小学生に合わせた話し方、相手の共感を得るため、自分の意見をスムーズに伝えるために工夫が必要であること、相手の既有知識に配慮しながら話さなければならないということ、スムーズな情報伝達のためには視覚資料などの表現手段を工夫し、事前の十分な準備が必要であることなど、この交流を通して発表のための技術が理解できたという意見が多い。菅野・西村（2007）でも指摘があるとおり、聞き手としての反応が明確な小学生を相手に発表をすることは、意欲的な学習者にとっては強い動機付けとなるのであろう。また、大勢の前での発表に慣れたという回答も多かった。やはり、擬似的ではない本物のコミュニケーション場面での発表活動がこのような意識を高めることに役立ったことは間違いないだろう。

また、後に述べる「心のつながり」がコミュニケーション意識を向上させる役にたったということもあるのではないだろうか。倉八（2002）では、コミュニケーション力を規定する心性として「対象や他者とところから対話する姿勢」をあげ、その発達に関わる適性要因、環境要因をマッキンタイヤーら（1998）のモデルを参考にしながら説明しているが、その適性要因の一つ、コミュニケーションの動機を生じさせるものに「個人間の関係性：相手を支配したいと思う場合・相手と親和的な関係を結びたいと思う場合」をあげ、「人がある他者を対話の相手として魅力を備え

ていると認知するためには、その他者がコミュニケーションへの動機を持つことが前提条件となる」(p.184)と述べる。小学生たちが留学生に対して親和的な関係を望み、心を開いてくれたことで、留学生が彼らを魅力的な対話の相手と感じ、それが彼ら自身のコミュニケーションに対する動機を強め、コミュニケーション技術についての意識を高めたと考えられるだろう。

教員が危惧した「小学生対象」の活動であることについては、問題視した留学生はいなかった。これは、OPIの中級レベルの留学生が多く、自分自身の話技能としてもどちらかと言うと具体的なものを説明するぐらいのレベルであることが関係し、具体的な物事の説明のレベルでのやり取りという課題で十分満足できたと言うことも考えられる。もし、上級～超級の留学生中心のクラスであったら、また別のアプローチが必要であるのかもしれない。

②本学の留学生に小学生との交流は相互文化理解に役立つと評価されるか

自国の小学生との違いに触れた記述はいくつか見られ、日本の小学生について何らかのイメージを持った学生もいたが、「地域、小学校、日本文化について学んだ」という記述は、活動内容や時間の限界からか、教員が期待したほど多くはなかった。

だが、今回留学生がもっとも評価したのは、小学生との心のつながりができたことである。留学生の留学に対する「満足」を規定する要因は教育内容と日本人との深い交流であり、そこから日本人や日本社会との間にいかに相互の共感や尊敬の念が芽生えるかということであるとされる(横田2007, p.67)。今回のような小学生との親近感の醸成はそのような共感のひとつであるといえないだろうか。普段どちらかというに限られた枠の人間関係しか持てない留学生たちにとっては、このように地域の子どもたちに感情面で受け入れられることは、異国での生活の不安軽減やその国の印象をよくするために大きな意味を持つといえる。いくつかの小学生と留学生の交流の中には単なる母国のイベントの紹介などにとどまり、留学生に「文化紹介をするだけの存在としか見られなかった」という印象を抱かせるものもあるようだが、交流の原点はやはり心の交流が成立したかどうか、「一人の人間として参加できる内容である(工藤2003, p.13)」かどうかであろう。親近感の醸成が可能だったのは自意識が強くなく頻繁に会う人には心を許していける小学生との交流ならではのことであろうし、それ以上に常に留学生を単なる国の代表というのではなく一人の人間として接するようにという小学校の先生方のご指導に負うものである。

また、今回の活動は学生たちにとって「異文化理解に役立った」という達成感を味わう機会であったようだ。このような講師の先生やお兄さんお姉さんとして役立った実感を持つということも、普段「学ぶ立場」「援助される側」に立ちがちな留学生が互恵的な関係を構成する機会となるという指摘もある(大島2001, p.77)。

5 今後の課題

今回の活動は、交流対象が小学生であるということ、複数回活動であること、小学生にとっての目標が異文化への親近感の醸成と自らそこへかかわっていける力の醸成であるということで、ある程度の活動の範囲や条件が決定された。もし同条件で次回活動するとしたなら、留学生の満足度をより高める小学校交流を目指して次回以降どのように活動をしていけばよいかを考察する。

①活動の順序

第1回交流活動の評価があまり高くないが、大きいグループでの言語中心の活動になってしまい、親近感が醸成されにくかったことに原因があると考えられる。小学生との交流は心の交流→情報の交流の順番が望ましい。そうでなければ双方向のよいレスポンスが生まれない。初めは心の交流を目指して体を使った親密感を高める活動による交流から始め、その後、言語的な交流活動へとつなげていった方がよいだろう。

②受信者と発信者双方になること、発話に対してのレスポンスを重視すること

大島(2001)では、留学生にとっての「良質の出会い」の条件として「(1) コミュニケーションが双方向に行われている。(2) 両者が互恵的な関係である」をあげ、双方向のコミュニケーションの大切さを述べている(p.76)。本交流活動においても、前述したとおり、留学生は活動の受け手(質問を受ける、提案された遊びに参加する)のみであるよりも、活動の与え手(情報を発信する、活動を主催する)でもあるほうが満足度が高い。そして留学生は小学生からのレスポンスに非常に敏感で、それで自らの発話活動を評価し、レスポンスのよしあしは活動そのものの満足感を左右していた。したがって、留学生の満足度を高めるためには、そのような双方向のレスポンスが小学生と留学生の間にどのように実現されるかに気を配って活動をプログラムする必要がある。

まず、活動については留学生も小学生も双方が、活動の主催者の立場に立つ機会があることが大切である。同時に主催者になる活動でなくてもよいが、活動機会が多い場合は片方だけがずっと主催者になることは避けたほうがいい。そしてどちらかが主催して行った活動であっても、それについての質疑応答を行うなど、その場で双方向のレスポンスを引き出すための十分な時間をとれば、留学生の満足が得られると考える。また、留学生の日本語レベルによっては、レスポンスを引き出す質問の技術なども前もって準備する必要があったといえよう。

活動の主催のバランスについては、小学4年生の興味の持続時間の考慮や、また現実的な授業時間の枠があったということから、今回は一つの活動に十分な時間が取れなかった。60分の間に小学生の主催する活動と大学側の主催する活動をともに行うなどの日もあった。これについては、担当者双方で話し合ったうえ、1日にどちらか一方のみを行い、全5回の中にそれぞれが主催する活動をバランスよく割り振るといったやり方のほうが効果かもしれない。

また、今回は、どちらかという一方が他方に教えるというような、言語的な流れが一方の活動が多かった。双方向の活動、または双方で同じ目的に臨むような活動があれば、また別の充実した活動となりえるだろう。

③交流活動での準備のあり方

今回参加したOPI中級レベルの留学生では、小学生の発信した文化的情報を受け入れるにも、それについて自らが意見を述べたり質問したりするにも問題が生じることもあり、まったく枠組みのない自由なやり取りでは双方が満足いくやり取りが十分成立したとはいえない。活動前は、即時の情報交換活動も日本語発話能力向上において意味があると考え、それは間違っていないと思うが、留学生の満足度を高めるためには、テーマについて十分語れるだけの内容や語彙、

または情報取りのスキルを高めるなどの準備がやはり必要であった。今後も交流内容やテーマをあらかじめ、大学・小学校双方で連絡しあい、それについての準備活動しておくほうがよいだろう。

今回のようなそれぞれに活動を提案しあう交流方式では、それぞれの発案が互いの学習目的からそれないように常に内容を取り合い、内容を細かく調整することが必要となる。今回小学校側とは全体の活動計画のほか、1回ごとに活動の計画や内容の連絡を取り合っていたため、大きな問題もなくスムーズに活動が行われたものとする。

6 おわりに

留学生にとって地域との交流は日本理解において、日本語能力向上において、さらに日本の生活での快適さの実感において大きな意味を持ちうる機会であるといえる。この交流を発案し、子供たちに留学生を受け入れる心の下地を作り、留学生を心をこめてご指導くださり、彼らに成長の機会を与えてくださった小平第十小学校の学校長先生、副校長先生をはじめ、第4学年の先生方に心から感謝を申し上げたい。

注

- 1) 荻原稚佳子, 増田眞佐子, 齊藤眞理子, 伊藤とく美 (2005)『日本語上級話者への道——きちんと伝える技術と表現——』スリーエーネットワーク
- 2) OPIとは、Oral Proficiency Interviewの略であり、「ACTFL (アクトフル, American Council on the Teaching of Foreign Languages: 全米外国語教育協会) によって開発された、テストと被験者が1対1で行なう、最長30分の会話能力テストのこと」(山内博之『OPIの考え方に基づいた日本語教授法——話す能力を高めるために——』ひつじ書房, 2005, p.2)である。判定レベルは初級, 中級, 上級, 超級に分けられるが、中級とは、意味のある陳述・質問内容を模倣でなく創造でき、日常的な場面で身近な日常的話題についての発話を文レベルの長さで行なうことは完全にできるが、それ以上の長さ・場面・話題・機能の発話では何らかの破綻が見られるというレベルを指す。2007年4月の「日本語会話」受講生には全員このOPIテストを行った。
- 3) 『日本語上級話者への道』の第6課「スポーツを説明しよう」を「国の遊びを説明しよう」としてそのルールや流れをわかりやすく説明するという目標に変える, 第9課の「物語を話そう」を各国の昔話のパワーポイント紙芝居作成に変えるなどした。
- 4) 倉岡 (2007) による

引用文献

- 上田美紀 (2003) 「留学生の小学校への訪問の意義と相互学習活動——その構築への課題」『異文化間教育』17, pp.52-61
- 大島まな・田村知子 (2001) 「留学生を活用する国際理解教育の内容・方法と教育効果に関する研究 (その1) ——大学周辺地域の小学校との国際交流活動を中心に——」『九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター紀要』6, pp.59-80
- 工藤義昭 (2003) 「横浜市国際学生会館における外国人留学生と日本人学生の交流」『留学交流』15-8, pp.12-3
- 倉岡睦子 (2007) 「小平第十小学校 4年生 総合的な学習の学習指導案 単元名 国際交流 (アジアの文化を知り, 日本の文化や自分の生活を考えよう)」
- 倉八順子 (2002) 「多文化間コミュニケーションを可能にするもの」渡戸一郎・川村千鶴子編著『多文化教育

- を拓く——マルチカルチュラルな日本の現実のなかで——』明石書店, pp.172-93
- 菅野真紀子・西村浩子 (2007) 「小学生との交流授業を通じたプロジェクトワークの試み——留学生の口頭発表能力向上を目指して——」『松山東雲女子大学人文学部紀要』15, pp.79-89
- 花見楨子・橋本顕彦 (2001) 「小学校における国際理解教育と留学生交流」『三重大学留学生センター紀要』3, pp.25-40
- 横田雅弘 (2007) 「留学生の適応と教育」江淵一公編『[オンデマンド版] 異文化間教育研究入門』, 玉川大学出版部, pp.67-84